

## 5/12 萩原朔太郎の足跡をたどる前橋ツアー実施

2018年5月12日、日本近代詩の金字塔を打ち立てた萩原朔太郎の足跡をたどる前橋ツアーが行われました。本ツアーは、本学国際日本学研究院 CAAS ユニットの徐載坤先生（韓国外国語大学）により、2018年度春学期科目「Japan Studies 1 ; 萩原朔太郎と近代日本」のアクティヴ・ラーニングの一環として企画・実施されました。

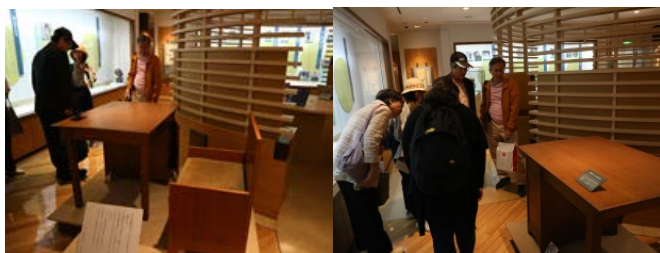
### ① 前橋文学館見学



参加者たちがまず訪れたのは前橋文学館。朔太郎の足跡をたどる展示パネルをはじめ、かばん、革靴、ギターにいたる遺品や自筆原稿、日記などを見学しました。



徐先生の第6回目授業で取り上げられた朔太郎の机と椅子が展示されており、参加者は、朔太郎自身がデザインしたという（セセッション形式と呼ばれる）それらの家具や側面に描かれた草模様を熱心に見入っていました。



その後、文学館4Fの資料閲覧室にて、朔太郎記念館スタッフのご厚意により、現在では貴重資料として扱われている朔太郎の書斎に貼られていた壁紙の一部を閲覧することができました。



### ② 萩原朔太郎記念館見学

広瀬川をはさんで文学館の正面にある朔太郎記念館に移動。ここには朔太郎が使用していた書斎、離れ屋敷、土蔵が移築復元されています。



まずは書齋を見学。当時この部屋は、先ほどの机や椅子をふくめ部屋全体がセセッション形式で統一されていたといひます。伝説的詩集群『月に吠える』『青猫』が執筆された空間に実際に接することができました。



その後、離れ屋敷に移動。北原白秋、室尾犀星らが朔太郎を訪れたさいはこの部屋に通されたといひます。朔太郎ご両親の趣味でしょうか、茶室がありました。朔太郎デザインの書齋とはうってかわって和風の造り。



最後に、萩原家の土蔵を見学。1945年8月の空襲で前橋市は甚大な被害に見舞われるも、朔太郎の貴重資料（日記、原稿、書簡等）の多くはこの土蔵に保管されていたため焼失をまぬかれたとのことです。「日本には資料が何でも残っている！」と徐先生は授業でしばしば述べられますが、そのためにこの土蔵が果たした役割は計りしれません。



お気に入りの朔太郎の写真を前にする徐先生です。



そして最後に集合写真。朔太郎ポーズでもう一枚。



朔太郎がその人生の大半をすごした前橋という土地を訪れ、『月に吠える』『青猫』が執筆された空間やその身近な遺品に接することで、萩原朔太郎の詩業とその背景をめぐる理解をいっそう深めてくれた充実したツアーでした。